

米と文化の里・ゆがわ

福島県

湯川村

米と文化の里 湯川村

磐梯山と飯豊山に見守られた
会津盆地の真ん中
広い空、広い大地

山々からの恵みの水は
山肌を走り

大地に沁み渡り

滋味あふれた豊かな土地ができました

四季折々の美しい自然の中に
古よりの深い信仰が息づき

おだやかな笑顔が行き交います

おいしい米

暮らしに溶け込んだ歴史と信仰
うつくしい豊かな自然

のびやかに生きる湯川村



村の花／アジサイ



村の木／イチョウ



村の鳥／カッコウ

会津のへそ 湯川村



福島県

目次

村長挨拶	01
歳時記	02
歴史と信仰	03～06
産業	07～10
教育	11
スポーツ・文化教養	12
福祉・健康	13・14
建設・消防・交通	15
交流・定住	16
議会・行政	17
湯川村マップと主な施設	18・19

湯川村の概要

湯川村は、会津のへそとも言われるように会津盆地の中心に位置しており、東に秀峰・会津磐梯山を仰ぎ、西に春日八郎の故郷会津坂下町、南は白虎隊で有名な会津若松市、北はラーメンで有名な喜多方市にそれぞれ接している交通の要衝です。

- 人口：2,873人（令和7年1月1日現在（福島県現住人口調査））
- 面積：16.37km²（県内最小面積）
- 標高：約180m（山がない村）

おいしいお米と豊かな風土 みんなで創ろう笑顔あふれる湯川村

ゆがわむら



「米と文化の里」ゆがわむらー

湯川村長 佐野 盛至

私たちの住む湯川村は、昭和32年3月に旧笈川・勝常2ヶ村の合併で誕生した県内で面積が一番小さく、山のない自治体です。

会津盆地の中央にあり、恵まれた自然環境の中で、先人が培った社会資源、地域の歴史、文化遺産を数多く引き継ぎ、これらを現代に生かして発展してまいりました。

今から約1、200年前の大同2年（807年）に徳一上人が開いたとされる本村中央部に位置する勝常寺には、国宝指定の仏像3軀、国重要文化財指定の仏像9軀が安置されるなど、平安初期の仏教文化を遺し、今もなお薬師如来が地域住民を加護しております。また、すり鉢の底、会津盆地のへそ特有の昼夜の寒暖差と粘土質の肥沃な土壌は稲作に適し、適地適作である稲作

文化は長く地域住民の生活と経済を支え、「米と文化の里」ゆがわむらの起源となっております。

平成の合併では自立を選択し、現在は「第五次湯川村振興計画（平成28年度～令和7年度）」に基づき、「村民が主役のむらづくり」、「健康から始めるむらづくり」、「環境と共生したむらづくり」の基本理念を発展させ、『おいしいお米と豊かな風土みんなで創ろう笑顔あふれる湯川村』を将来像と定め、その実現を目指しております。

将来を見据えた施策を積極的に展開し、村民だれもが「湯川村に住んで良かった。これから湯川村にずっと住み続けたい。」と思う、そして村外の人は「私も湯川村に住んでみたい」と思うむらづくりを進めてまいります。

湯川村歳時記

1月

新春のつどい／消防出初式／書き初め大会
文化財防火訓練／歳ノ神／保育所団子さし

2月

保育所・幼稚園豆まき／小学校スキー教室／
幼稚園そり遊び／村民バレーボール大会

3月

保育所・幼稚園ひな祭り／保育所修了式／
幼稚園卒園式／小中学校卒業式／離任式

4月

保育所はじまりの式／幼稚園入園式／
小中学校入学式／勝常寺祭礼／

消防団春の防火パレード・春季検閲

5月

小学校運動会
村民ハイキング／村民検診／

村民壮年ソフトボール大会

7月

村民芸能発表会

8月

二十歳のつどい／ゆがわ夏まつり／
村民グラウンドゴルフ大会

9月

村民運動会／敬老会／交通安全鼓笛パレード／
村民ソフトボール大会／幼稚園運動会

10月

新米まつり／小学校学習発表会／
消防団秋季検閲／中学校紫陽祭

11月

産業文化祭／少年の主張／
消防団秋の防火パレード／幼稚園発表会

12月

幼稚園クリスマスお楽しみ会／
保育所発表会／ウィンタイルミネーション



歴史と信仰



勝常寺と国宝



徳一上人坐像

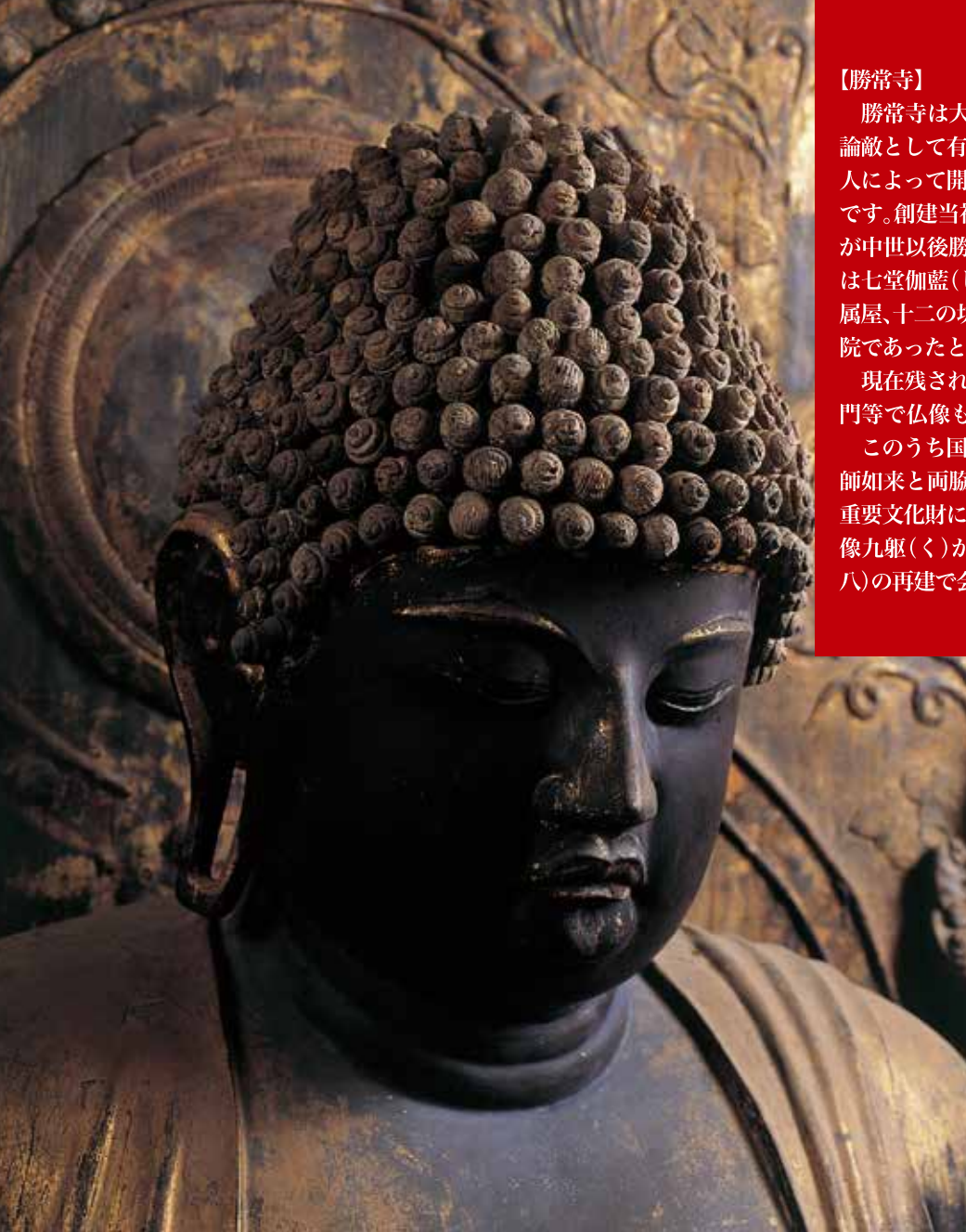
会津盆地の中央に位置する湯川村には、大同二年（八〇七）に法相宗の学僧・徳一上人が開いたと伝えられる勝常寺があり、平安初期の仏像十二体が現存します。本尊の薬師如来と日光・月光両脇侍像（につこうがつこうりょうききょうじぞう）は、平成八年に国宝の指定を受けており、造像の年代については、九世紀初めと推定されています。

徳一は弘仁年間（八一〇―八二四）には会津に居住していたと言われ、開創の伝承を持つ寺は南東北・関東にまで及んでいます。奈良仏教の側に立っていた徳一は、天台宗の最澄に

論争を挑んだことで知られています。

「一切衆生（いっさいしゅうじょう）に仏性を認める仏教の日本化に抵抗し、仏教の本来の厳しさを説いたのです。」

東国の地に寺院を創建し、衆生に救いの道をもたらした徳一に、最澄と同時代人であった空海は、一目も二目も置いていました。弘文六年（八一五）に、空海から会津の徳一にあてた書簡のなかで、「徳一菩薩は、戒珠（かいじゆ）氷玉のごとく、智海弘澄（ちうかいこうしやう）たり。斗藪（とそう）として京を離れ」と書いているほどです。



【勝常寺】

勝常寺は大同二年(八〇七)、最澄(伝教大師)の論敵として有名な法相宗の碩学(せきがく)徳一上人によって開かれた東北を代表する古刹(こさつ)です。創建当初の寺院名は詳らかではありませんが中世以後勝常寺としています。創建された当時は七堂伽藍(しちどうがらん)が備わり、多くの附属屋、十二の坊舎、百余ヵ寺の子院を有する一大寺院であったと伝えられています。

現在残されている建物は薬師堂、本坊、庫裏、中門等で仏像も三十余軀(く)あります。

このうち国宝に指定を受けているものに木造薬師如来と両脇侍像(りょうぎょうじぞう)があり、重要文化財に指定を受けているものに元講堂と仏像九軀(く)があります。講堂は応永五年(一三八八)の再建で会津中央薬師堂と呼ばれています。



【日光・月光菩薩立像】

本尊の薬師如来坐像の脇侍(わきじ)。像高は日光菩薩が一六九、四センチ、月光菩薩が一七三、九センチ。寺伝で



国宝

は日光・月光菩薩が逆で、明治三十六年の国指定の際に現在の名称に変えられたそうですが、左手を挙げているのが日光菩薩、右手を挙げているのが月光菩薩です。ケヤキの一木造りで、厳しい表情の薬師如来とはうって変わった柔らかな表情、七頭身のしなやかな姿態に前時代である天平様式の特徴がみられます。また、腰から大腿にかけて厚みを増した肉感性や足もとの流れるような衣のひだに、薬師如来像と共通した特色をもっています。

【薬師如来坐像】

薬師堂の本尊。像高一四一、八センチ。本像はケヤキの大材から像形を彫り出し、前後に割つてから内割りした後木目に合わせて再度接合するという「一木割刳造(いちばくくわぞう)」と呼ばれる技法を用いた古い作例として知られています。像容は、狭い額に彫りの深い目



国宝

鼻立ち、厳しい表情、厚い胸板から両腿にかけて圧倒的な量感、その上に流れる飄波式衣文(ひょうはしきいもん)など、平安初期特有の彫刻様式が如実に現れています。

用材からは当地における製作と考えられますが、その造形技術は東北地方にある他の平安初期作例と比べてきわだって優れております。

また光背はスギ材を用い、宝相華葡萄唐草(ほうそうくわとうそう)を浮彫りにした蓮弁形二重円光で、当初のものとみられ、同じくスギ材を用いた宣字座も部分的に古材を残しています。両脇侍である日光・月光菩薩立像とともに平成八年(一九九六)国宝に指定されました。

その他の文化財

国重要文化財



【勝常寺薬師堂】

通称、会津中央薬師堂と呼ばれ、応永五年（一三九八）に蘆名家（あしなけ）家臣の一人である富田祐持（とみたすけもち）によって再建されたと伝えられます。桁行五間、梁間五間、単層の寄棟造（よせむねづくり）で、屋根は茅葺でしたが、昭和三十九年に銅板葺となりました。内陣には須弥壇・厨子（しゆみだん・ずし）が設置されています。この須弥壇・厨子を含めた建物は、和様の構造を持ちつつも、軸部や組物に禅宗様式を用いており、東北地方の中世寺院建築の代表例として、明治三十六年に国の重要文化財に指定されました。

国重要文化財



【木造十一面観音立像】

現在の宝物殿が建てられる前にあった観音堂の本尊であり、勝常寺の仏像の中では最大の大きさを持ちます。他の仏がすべてケヤキ材であるのに対して、この用材はヒノキかカツラと言われています。

大きく伸びやかな体軀（たいく）に比して頭部はやや小さく、穏やかな中にも端嚴な相を示しています。近世になって安置されていた堂宇（どうう）が火災にあつたとされ、そのころに手が加えられています。頭上の化仏（けぶつ）・持物（じぶつ）・台座・両手先は後補ですが、堂々たる体軀（たいく）や衣の表現には平安初期の様式が残っています。

国重要文化財



【伝虚空蔵菩薩立像】

こくうぼうざう
りゅうぼうざう

別名天部立像といえます。ケヤキの一本造りで、袍衣をまとった貴人の姿であらわれます。いつの世からか虚空蔵菩薩像と呼ばれていますが、古記録では辨才天像（へんさいてんざう）と呼ばれたこともあったようです。顔面や持物に後世の手が加わっていますが、他の諸像に劣らない体軀や纏ま（まと）とついている衣に平安初期の様式がみられ、さらに在地の仏像に共通した素朴な造形が表現されています。台座も当初の優作です。

国重要文化財



【木造聖観音立像】

ケヤキの一本造りで、木目が美しい精錬された技巧になる優作です。台座は、失われた他の像のものを利用しているらしく、像に対し、蓮台は大きくすぎるようです。

他の仏像と同様、翻波式衣紋（ほんばしきいもん）で、張りのある身体は均衡がよくとれ、端麗かつ流麗な容姿に天平の余韻を残しています。

国重要文化財



【地藏菩薩立像（雨降り地藏）】

通称「雨降り地藏」と呼ばれ、大正の初期まで日照りがあつたとき、本像を境内の前にある池の島に出して雨乞（あめご）を行ったことから、この名がつけられました。姿はもう一軀の地藏菩薩立像と同じで、内割りしないケヤキの一本造りです。

衲衣（のうえ）のうえの手法は天平様式の伝統を引き継いでおり、慈悲柔和に満ちた童顔をそなえています。

国重要文化財



【地藏菩薩立像】

別名延命地藏と呼ばれ、宝物殿が建てられる前には薬師堂に安置されていました。

顔を彫り直し金箔を施しているの、表情に深みはないが、堂々たる体軀や衣の表現は、雨降り地藏と同様、天平様式の伝統を引き継いでいます。

国重要文化財

【四天王立像】

仏教世界の四方を護る神を総称し、持国天（じこくてん）（東方）、増長天（ぞうちやうてん）（南方）、広目天（こうもくてん）（西方）、多聞天（たもんてん）（北方）からなります。甲冑（かこう）に身を固め、それぞれ武器を持ち邪鬼を踏んで立つ形で表現されます。薬師三尊と同時期の造

立と考えられ、足下の邪鬼までも一材で掘り出しています。腕の部分は後世に修理されているものの、腰をひねって体軀全体に鋭い動きが表現され、忿怒（ふんぬ）の表情がよく強調されています。奈良時代に制作された大安寺四天王によく似ているといわれます。



持国天



増長天



広目天



多聞天



勝常念佛踊りは、先祖の供養と五穀豊穡を願って、毎年四月二十八日に行われます。

勝常念佛踊りは、会津では一般に「会津大念佛踊り」といわれており、江戸時代頃から隆盛期を迎えました。戦時中から戦後にかけて中断しましたが、この踊りの持つ文化・伝統を継承するため、地域の人々によって昭和五十八年に復活しました。平成十五年には喜多方市と合わせて「会津大念佛撰取講(あいづだいねんぶつせつしゅこう)」として県の重要無形民俗文化財に指定されました。



福島県無形民俗文化財

勝常念佛踊り

念佛踊りは平安時代末期の空也上人(九〇〇年〜九七〇年)に端を発し、一遍上人(一二三九年〜一二八九年)の頃に盛んになった民俗芸能です。



北田城跡(湯川村指定史跡)



の丸を区画する堀跡や井戸跡から中国銭や13世紀代の白磁・青磁が発見されました。その下には9世紀代の土師器や須恵器が多数出土した古代の集落跡も存在していることがわかりました。

北田城跡は、本丸・二の丸、北側に出入りや橋かくしの土手を備えた、東西220m、南北210mの、中世において県内最大級の規模を誇る平城です。

建久4(1193)年、佐原次郎廣盛(さはらじろうひろもり)によって築かれ、中世を通じ北田氏の居館となったとされます。

昭和58年に県営ほ場整備事業に伴う発掘調査が行われ、本丸や二

浜崎城跡(湯川村指定史跡)



本来廃城となるべきところ、お茶屋として残されたとされます。浜崎城跡は、平成9〜10年にかけて造成事業に伴う試掘調査が行われ、城の東側に馬出(うまだし)と想定されるコの字形の堀と東曲輪が発見されました。現在は本丸の北東側〜北側部分と、南西部に土塁と堀跡が良好な状態で保存されています。

浜崎城跡は本丸・二の丸・東曲輪(ひがしくるわ)、さらには西側に町場を囲いこんだ、近世初頭の城跡です。

慶長6(1601)年、当時塩川の古町周辺にあった浜崎城を蒲生秀行の家臣である蒲生主計介郷貞(かずえのすけさとさだ)が拝領、水害を恐れ、現在の浜崎の地に城を移しました。その後元和元(1615)年に発布された一国一城令の際は、



殿田遺跡

現在の役場と湯川中学校のあたりを含む古代の集落跡です。竪穴住居跡26軒が発見され、鍛冶を行っていた痕跡も見つかりました。



堂後遺跡

現在の勝常寺薬師堂付近で百メートルもある区画施設と、その近くから「●●寺」と書かれた墨書土器が発見されています。

桜町遺跡(模型)

現在の八日町周辺で、会津縦貫北道路の建設で見つかった遺跡です。弥生時代終末〜古墳時代初めの集落跡と周溝墓群は「米どころ」湯川村のルーツとなる発見です。



村の遺跡・城跡

会津盆地のど真ん中であって、仏教文化の中心となる勝常寺、そして古代から中世の交通の要衝として重要な役割を果たしてきた湯川村では、多くの遺跡が見つかります。

産業

美しい田園風景と
活力ある農業の「むらづくり」



本村の歴史は稲作の歴史でもあります。全てを手作業で行っていた時代から、機械化された現在まで、湯川村の人々は稲作と共に生きてきました。実りの秋を迎える時が、村が一番活気づく時でもあります。福島県でも有数の米どころ、湯川村にとって稲作は重要な生活基盤です。

会津盆地のほぼ中央に位置する湯川村は、標高180m前後の起伏のない平坦地です。北には猪苗代湖を源とする日橋川が、西には阿賀川の本流が流れ、それらの清冽な水と肥沃な大地が広がっています。

基幹産業である農業は、稲作を中心に、野菜、畜産などを組み合わせた複合経営によって営まれています。

全世帯の36%を農家が占め、村の総面積の約6割が水田であり、米作りがされています。本

村のお米は、粘り、艶、そして食味に優れ、一反あたりの収穫量も県内で上位に位置しており、県内で屈指の米どころとして知られています。

しかし、農業機械や資材の価格高騰、需要不均等による価格の不安定化に加え、後継者不足、従事者の高齢化が進み、農業を取り巻く情勢は年々厳しくなっているのが現状です。

今まで以上に、消費者需要に応えることのできる作物の生産と出荷を実現していくためには、農業地域としての経営基盤





の整備と農業用施設、機械の充実、大型化を促進し、スマート農業技術の導入、認定農業者を中心とした地域計画における農業を担う者への農用地の集積、集約化による経営コストの削減に努め、他地域の農作物にはない、産地の特性を生かした差別化を図りながら、安定経営を図ることが重要になると考えられます。担い手不足に対しては、安心して農地を貸すことができる組織も必要となってくることから、平成30年に村とJAの共同出資による農業生産法人会津湯川ファームを設立しました。また、水稲作付と合わせた施

設園芸等を加えた複合経営により、高収入を確保する地域営農体制の構築を図り、有機資源の重要性にかんがみた畜産業との連携も必要となります。

安全安心な米づくりが叫ばれるようになった近年では、減農薬・減化学肥料での栽培を推進し、特別栽培米など、持続可能な食料システムの構築にも力を入れています。

野菜は夏秋のトマト、キュウリなどの他に、近年では長ネギの栽培が盛んで、出荷量も増えてきています。



明日へつなぐ 湯川村商工業の実現



特産品として挙げられるのは一〇〇%湯川村産の大豆で作る純国産手作りみそや、掛米に湯川産コシヒカリを使用した純米酒「瑠璃光(るりこう)」などです。

本村は、本村面積の約7割が農地であり、そのうち、約9割以上で水稻栽培が行われている「米の里」です。

その中で、村内には工業団地のほか、事業所が複数存在し、地域の賑わいづくりに貢献しています。村内事業所の多くは小規模ですが、地域に密着した魅力ある店づくりに努めており、本村において、重要な存在となっています。

近年は、新規創業者が毎年のように現れており、商工業の未

湯川カントリーエレベーター



湯川村工業団地

来の担い手として期待されているところだ。

村内の商業は規模も小さく、大半が兼業ですが、地域に密着した魅力ある店づくりに努めています。

引き続き、既存事業所の経営安定や新規創業者支援、販路拡大支援等のための行政施策を講じるとともに、村民の利便性向上のため、企業誘致等を積極的に展開していきます。

人と人が出会う場所 道の駅あいづ 湯川・会津坂下



湯川村と会津坂下町が共同で整備したこの道の駅は、美味しい野菜や果物、この地ならではのお土産品、手間暇かけたお食事を通じて、さまざまな人と人が出会い、触れ合う場所になっています。



会津盆地の中央にできたこの道の駅では、本村をはじめとする会津管内の新鮮な野菜や果物、この地ならではのお土産品、地元食材を活用したお食事などを提供しており、村産品の販路拡大、ひいては地域経済の活性化に貢献しています。

また、「道の駅」阿賀川河川における「佐野目地区かわまちづくり」による親水空間、「河川防災ステーション」を自治体、河川管理者、道路管理者が一体となって整備した東北初の拠点整備事業でもあります。

複数自治体で整備した全国的にも珍しい道の駅で、共同設置者の会津坂下町とともに、管理・運営を行っています。

今後は本村の出荷品を推進するとともに、付加価値の高い農産品や新たな産品の開発を手掛け、産業の活性化を図っていきます。

このほか、「佐野目地区かわまちづくり(第2期)」計画に基づき、村内外の方の交流の場となる新たな親水空間を整備していきます。



教育

笑顔で学ぶ
心豊かな
「むらづくり」



少子化や多様化する教育ニーズへの対応、安全安心な学校運営に地域全体で取り組んでいます。また、小中学校の給食の無償化や小学校のプールの改修など学校施設の整備とともに、全ての子どもたちが落ちついた環境の中で学習に取り組めるよう各校に教育支援員を配置しています。さらに、小学校の適正規模、小中一貫教育などの検討を進めています。

次世代を担う子どもたちが自信と希望、郷土を愛する心を育むことができるように、時代の変化や課題に柔軟に対応した教育活動を進めます。子どもたちが自主性、創造性を培い、個性豊かに生き生きと学べるように「知・徳・体」のバランスのとれた学校教育を目指します。

具体的な取り組み

- ① 学力向上対策の推進
- ② 人間関係づくりの推進
- ③ 図書司書の配置
- ④ 教育支援員の配置
- ⑤ A・L・Tの複数配置
- ⑥ 教育施設整備
- ⑦ ICTを活用した授業
- ⑧ 郷土の学習の推進
- ⑨ 幼稚園預かり保育の充実
- ⑩ 学校運営協議会の設置
- ⑪ 学校給食の無償化
- ⑫ 保育料の無料化



スポーツ文化 「教養」



生涯にわたって
いきいきとした
暮らしを実現する
「むらづくり」

スポーツ・レクリエーション活動は、健康増進・体力向上に繋がるだけではなく、仲間との交流や地域コミュニティとの結びつきにも繋がり、村民一人一人が活力ある生活を送るために欠かせないものと言えます。

近年、本村のスポーツ・レクリエーション振興においては、スポーツ団体構成員の高齢化や若者のスポーツ離れが進み、参加者の減少が課題となっています。

村民一人ひとりがスポーツやレクリエーション活動を楽しみ、豊かで潤いのある生活を送るために、施設の整備、指導者の育成、村民のライフスタイルとニーズにあったスポーツ・レクリエーション活動の開発、スポーツ活動情報の提供など生涯スポーツ振興の土台の強化が必要となっています。

また本村では、長年にわたつ

て、子どもから高齢者まで幅広く、さまざまな芸術文化活動や生涯学習講座・教室が行われていますが、参加者の固定化、少数化、高齢化が課題となっています。

心豊かで潤いのある生活を送る上で、村民一人ひとりが個性と創造性を発揮し、「健康づくり、仲間づくり、生きがいづくり、絆づくり」に結び付く活動の機会や場をより多く提供していきます。



福祉・健康

いつも健康で
共に支え合える「むらづくり」

高齢者が生きがいを実感しながら活躍できる社会の実現

村の高齢化率は、2023年で35・4%となりました。高齢者人口は2020年にピークを迎えその後減少していますが、それ以上に65歳未満の人口も減少しているため、高齢化率の上昇は今後も続くものと推測されます。

元氣な高齢者がむらづくりに関わることがますます重要となり、これまでに培ってきた経験や知識を活かし、積極的に活動し生きがいを感じることができ

る福祉社会を実現することが大切です。

高齢期を迎えても、住み慣れた地域で、それぞれが地域の助け合い・支えあいの一役を担い、地域全体で支え合っていくことが重要です。超高齢化時代の今だからこそ、高齢者が、自分らしく生きがいを実感しながら、心豊かに暮らせる社会を実現します。

誰もが生涯安心して暮らせるむらづくり

住み慣れた地域で生涯にわたり安心して心身ともに健康で生き生きと暮らしていくことはすべての人々の願いです。湯川村では、保健、医療、福祉の各分野が連携し、地域全体の支え合いの元、誰もが安心して日常生活を送れる環境を整え、持続可能な先進予防型のむらづくりを進めています。

村民が健康の保持増進や予防に取り組むことができる環境づくりと介護予防や生涯学習等の活動を広めていきます。

また、障がい者が必要としているサービスを自ら選択し、決定できるような支援・相談体制の充実に努め、社会参加を促進していきます。

さらに、次代を担う子どもたちが心身共に健やかに育つことができるように、こども家庭センターを中心に家庭、地域、学校、その他関係機関と連携を図り、子どもを安心して生み育てることができる環境づくりを進めます。





生涯にわたる健康づくり
『健康寿命の延伸』

すこやかにいきいきと活躍できる笑顔あふれる湯川村の実現に向け、健康づくりの拠点となる保健センターでは、各種健診をはじめ、脳血管疾患、虚血性心疾患、糖尿病などの生活習慣病のリスクを早期に発見し、重症化予防に努めています。

「こころの健康」では、社会が高度化・複雑化する中で、大人、子どもを問わず強くストレスを感じ、不登校、睡眠障害、うつ病、アルコール依存症など様々な問題を抱える人が増加しています。そのため、支え合いや気軽に社会参加できる体制を整え、「こころの健康」の維持・向上を図ります。



湯川村は無医村ですが、4km以内に会津医療センターをはじめたくさんさんの医療機関があり、高度な医療を受診できる環境にあります。

人生100年時代を迎え、健康課題も多様化しています。様々なライフステージにおいて、生涯を通じた健康づくりを着実に進め、誰一人取り残すことなく「健康寿命の延伸」を目指します。



建設・消防・交通



安全・安心で
誰もが快適に住める
「むらづくり」

南は会津若松市、北は喜多方市に隣接し、会津盆地の中央に位置する本村は、会津地域の交通の要衝となっています。

東部を会津縦貫北道路と国道121号が南北に、西部を国道49号が南北に、村のほぼ中央を主要地方道会津坂下・河東線が東西に走り、この他に県道が3路線あり、幹線道路として重要な役割を果たしています。

また、高速交通網において、本村は磐越自動車道の会津若松ICの至近に位置しており、会津縦貫北道路の湯川北・南IC2箇所の設置は、高速交通への



アクセスを高め、会津平野部交通ネットワークの中心的な役割を果たしています。

この他、幹線道路整備や歩行者、高齢者に優しい交通環境整備に向け、関係機関との調整に努めます。

また、集落内道路などの生活道路についても、維持改良を進めていきます。

冬場の生活交通路線を確保するため、車道及び歩道の除排雪も充実していきます。



交流・定住



美田園住宅団地

お互いに心行き交う 活力のある「むらづくり」

本村の文化・自然環境資源と

しては、東北を代表する名古刹「勝常寺」と磐梯山などの山々に囲まれた景観や緑豊かな水辺空間などがあり、特に「勝常寺」は国宝「木造薬師如来、両脇侍像」を拝観に広く村内外の方々が訪れています。

また、平成26年10月にオープンした道の駅あいづ 湯川・会津坂下」には毎年100万人を超える方が訪れており、新たな観光スポットとなっています。

今後は、道の駅を訪れた方に村内を周遊していただき、本村の様々な魅力を発見していただけるようにむらづくりを進

めていきます。

移住・定住につなげていくためには、若者世代から注目されている子育て支援や教育環境の情報発信を積極的に行うとともに、移住の受け入れ体制を整備していくことが重要となっています。

また、高齢者とともに増加しつつある空家について、発生の予防、利活用を積極的に推進するとともに、空き家を活用した移住・定住の促進に努め、全国的な課題である人口減少の緩和、ひいては、人口増加を目指します。

●湯川村ゆかりの人物



「男はつらいよ」シリーズ
撮影監督 高羽哲夫さん



湯川村名誉村民
彫刻家 佐野文夫さん



議会・行政



本村では平成二十八年三月に、平成二十八年度から令和七年度までの十年間の第五次湯川村振興計画を策定しました。

計画は、本村の将来像と基本理念を定めた「基本構想」と政策・施策・事業の体系や内容を明らかにした「基本計画」で構成されています。

基本構想の中で、基本理念として、

①「村民が主役のむらづくり」

②「健康から始めるむらづくり」

③「環境と共生したむらづくり」

の3つの柱を掲げ、人々が安らぎを感じ、誰もが定住したくなるような生活空間の創造を進めています。

この基本理念に基づき、基本目標は次のように定められています。

あ 安全・安心で誰もが

快適に住める「むらづくり」

い いつも健康で

共に支え合える「むらづくり」

う 美しい田園風景と活力ある

産業基盤の「むらづくり」

え 笑顔で学ぶ

心豊かな「むらづくり」

お お互いに心行き交う

活力のある「むらづくり」

以上5つが、「むらづくりのあい
うえお」です。

「おいしいお米と 豊かな風土
みんなで創ろう 笑顔あふれる
湯川村」を目指します。

◆湯川村議会

村民の声を代弁し、行政に反映させるためにあるのが湯川村議会です。

議会は選挙によって選ばれた議員によって構成され、村の予算や条例について話し合い、村の意思を決定します。

そして、村の行財政の運営や事務事業の実施がすべて適正に、しかも、公平・

効率的になされているかどうかを監視しています。

定例会は三、六、九、十二月の年四回で、それ以外にも必要に応じて行われる臨時会があります。気軽に傍聴できます。

また、本会議はインターネットでも配信しています。



「おいしいお米と 豊かな風土

みんなで創ろう 笑顔あふれる 湯川村」

ゆがわむら



村章

村民憲章

- 1、郷土を愛し、心豊かな村をつくりましょう
- 1、自然と文化に親しみ、美しい村をつくりましょう
- 1、互いに助け合い、心のかよう村をつくりましょう
- 1、決まりを守り信じ合い、住みよい村をつくりましょう
- 1、健康で仕事に励み、明るい村をつくりましょう

むらづくり基本理念

- ①「村民が主役のむらづくり」
- ②「健康から始めるむらづくり」
- ③「環境と共生したむらづくり」

基本目標

むらづくりのあいうえお

- あ 安全・安心で誰もが快適に住める「むらづくり」
- い いつも健康で共に支え合える「むらづくり」
- う 美しい田園風景と活力ある産業基盤の「むらづくり」
- え 笑顔で学ぶ心豊かな「むらづくり」
- お お互いに心行き交う活力のある「むらづくり」



- 人口:2,873人
(令和7年1月1日現在(福島県現住人口調査))
- 面積:16.37km²(県内最小面積)
- 標高:約180m(山がない村)



湯川村マスコット

「ゆがわまいちゃん」のプロフィール

合併50周年記念事業の一環として、村のキャラクターを公募し、平成19年5月に決定後、平成25年の夏に誕生しました。

- ①誕生日:平成25年8月18日生まれ。
- ②キャラクター:湯川村産のおいしいお米で炊いた「ご飯」を擬人化。
- ③特技又は好物:ご飯に合う食べ物なら何でも食べちゃうちょっとあわてんぼうの食いしんぼう。
- ④ひとこと:ふるさと納税で、ぜひわたしをご賞味ください!

1



北田城址

2



村宮野球場

3



笈川小学校

4



湯川村工業団地

5



デイサービスセンター

6



湯川中学校

7



村宮テニスコート

7



湯川村保育所

8



ゆがわ幼稚園

9



役場

10



公民館



除雪車庫

10



ユースピアゆがわ

10



湯川村体育館

11



JA会津よつば湯川支店

12



保健センター

12



高齢者コミュニティセンター

13



勝常寺

14



湯川たから館

15



勝常小学校

16



道の駅あいづ 湯川・会津坂下

17



会津縦貫道



せせなぎ川

堂島駅

会津医療
センター

121

湯川村の主な 名所・施設





おいしいお米と
豊かな風土
みんなで創ろう
笑顔あふれる湯川村



発行／福島県湯川村

〒969-3593

福島県河沼郡湯川村大字清水田字長瀬18番地

TEL.0241-27-8800／FAX.0241-27-3760

<https://www.vill.yugawa.fukushima.jp>

発行：2025年3月